

革命

男

女

現地の人々

1 キューバ ハバナの革命記念館前

革命記念館から出てくる男女。

歩きながら男と女は話している。

男 「確か、スペイン語の方言で「おい」とか「なあ」とか。そういう意味だったと思います」

女 「「チェ」がですか」

男 「ええ。「チェ」が」

男 「彼の口癖だったそうです」

男 「アルゼンチンでは使われる言葉だったけれど、キューバ人には聞きなれない言葉だったようで」

女 「そうなんですね。それがそのままあだ名に」

男 「本名はエルネスト・ゲバラ・デラセルナ」

女 「お詳しいんですね」

男 「いえ。本の受け売りです」

女 「スペイン語は？」

男 「全然」

女 「私も」

女 「だから。さっきの記念館の展示も、何かが書いてあるのかさっぱりで」

横切る現地の人々が話しかけてくる

現地の人 「オラ」

男 「オラ」

女 「オラ」

現地の人 「アンニョンハセヨ、ニーハオ、コンニチワ」

女 「全部言った」
男 「こんにちわ」
現地の人 「ハボン？」
男 「ハボン」
女 「ハボン」
現地の人 「イチロー・スズキ」
男 「イエス。イチロー」
現地の人 「ヒーイズグッドプレイヤー。チャオ」
女 「チャオ」
男 「チャオ」

去っていく現地の人

男 「こっちに来てからハボンとばかり言ってます」
女 「私もです。日本人が珍しいんですかね」

女 「他に日本の方って見かけました？」
男 「いえ。僕は初めてです」
女 「私もです」
女 「すみません。つい話しかけてしまっ」
男 「いえ」

2 ハバナ旧市街 オープンカフェ

男 「彼はキューバの革命後もアフリカや中南米全体を解放するために戦い続けました。アンゴラ、モザンビークス、コンゴ、そしてボリビア。革命の最終目標は人間を解放することであると最後まで戦った」
女 「ゲバラが世界中で愛されている理由ですね」
男 「この国が歩んできた道のりはとても特殊です。日本とはまるで真逆のように感じます」
女 「私も社会主義の国に来たのは初めてで。とても新鮮です」
女 「スターバックスもマクドナルドもない」

男 「まあ。スターバックスは僕の地元にもないですけどね」
女 「そうでしたか」

男 「郡山まで出ればありますけど」

女 「キューバには観光で？」

男 「まあ。ほぼ観光ですけど」

男 「家が福島で農家をしていまして。まあその関係もあって」

女 「そうですか」

男 「キューバ革命の最大の目的の一つに農地改革がありました。ゲバラは全国農業革命局の総裁としてキューバ全土の農地を指導して回った。農業とも深い関わりがあったんです」

女 「農業でも革命を」

男 「ええ」

男 「田んぼアートをご存知ですか」

女 「田んぼアート？」

女 「すみません。わからない」

男 「田んぼに絵を描くんです」

男 「品種の違う稲を育てて色分けをして絵にするんです」

女 「ああ。・・・見たことがあるかもしれません。何かで」

男 「もともとは青森の方で有名になったんですけど。三春町でもやっているんです」

女 「そうですか」

女 「大変そうですね」

男 「ええ。画用紙に絵を書くのとは訳が違います」

男 「苗が稲にまで育たないと上手くいっているかどうかともわかりません。年に一度しか描くことはできない」

男 「僕はチェ・ゲバラの肖像を描こうと思っています」

女 「田んぼにですか」

男 「ええ」

男 「ゲバラがキューバ革命を達成したのが 31 歳。来年僕はその歳を迎えます」

男 「僕も起こしたいんです。革命を」

女 「田んぼアートにですか」

男 「そんな大げさなことでもないんですけど」

男 「ゲバラを描くことで自分の中で何かが変われる気がするんです。何と言っていいか。その決意表明みたいなものです」

男 「でも。実はまだ父親を説得できていません」

男 「なんとか説得して来年には。そのためには一度キューバに行かなくてはと思いましたが」

女 「お父さんも、そのうちきっとわかってくれますよ」

女 「そうですか。それでキューバに」

女 「私は。ただの観光です」

横切る現地の人と話しかけてくる

現地の人 「フェアフロム？」

男 「ハボン」

女 「ハボン」

現地の人 「ハボン！」

男 「シー」

現地の人 「ウチマタ」

現地の人 「ワザアリ」

女 「あ。柔道の」

男 「ああ」

現地の人 「チャオ」

女 「チャオ」

男 「チャオ」

去っていく現地の人

男 そうかキューバは柔道も。

女 盛んなんですね。

手をつないで店を出て行く二人。

3 カーサの室内

ベッドにいる二人。上半身を起こして座っている。男の腕は女の肩に回されている。

男 「本当の革命家は大いなる愛に導かれている。愛のない革命家なんて考えられない」

女 「彼の言葉ね」

男 「自分の利益ではなくどう社会のために生きるか考えるのが真の革命家だ」

女 「そうなのね」

男 「親父は助成金をもらうことしか考えていない。出荷量が減り機能しなくなっていた田んぼを活用するために始めたんだ」

女 「でも、あなたは違う」

男 「近隣の高校にも話を聞いてもらっている。学校の年間行事として生徒たちに参加してもらおうと考えてる。農業と教育のもと、より質の高い田んぼアートを目指す」

見つめ合う二人。

女 「来年の夏には見れるのね。ゲバラが」

男 「君にも見に来て欲しい。僕の革命を」

女 「ええ」

口づけする二人

女 「うらやましわ。私には何もない。何の理由も計画性もなくこの国に来た」

男 「計画なんてものは大したことではないよ」

男 「ゲバラたちの革命の計画だって相当にずさんなものだったらしい」

女 「そうなの？」

男 「ゲバラは、定員 12 名の船に 82 人の即席兵士と武器を詰め込み、キューバへと向かった」

女 「乗れるの？」

男 「乗せたんだ。無理やりにね。嵐に見舞われた船内は船酔いする兵士たちの嘔吐する汚物にまみれていた。7 日間海を彷徨ったゲバラたちはやっと陸地を発見する。「上陸というより遭難だった」とのちにゲバラは言っている」

男 「上陸前に政府軍に見つかり攻撃を受け部隊は散り散りに。飢えと渇きに耐えながら森を彷徨った。貴重なミルクを保管していた隊員は容器をポケットに逆さまに入れていたため中身を全てこぼした」

女 「ドジね」

男 「ゲバラは飲み水を確保するため、本で読んだ記憶をもとに、水に海水を混ぜるよう指示した」

女 「そんなやり方があるのね」

男 「ああ。でも失敗して残りわずかな飲み水を全てダメにした」

女 「失敗したのね」

男 「森のなか行軍する方向が分からなくなった時は、ゲバラは北極星を目印に進んだ」

男 「ただゲバラはどの星が北極星なのかを知らなかった」

女 「なんだかすごいわ」

男 「計画から大幅に遅れ、ゲバラがカストロと合流できたのは上陸から 16 日後」

男 「82 人いた援軍はたった 12 人になっていた」

女 「そんなに。でも 12 人で。乗ってきた船の本来の定員ね」

男 「確かに」

男 「援軍のはずが、ずたぼろの 12 人が助けを求めて合流したかたちだ。さすがのゲバラも、そのあまりの状況に意気消沈した」

女 「そうね。さすがに」

男 「しかし、このときゲバラたちを見てカストロは言った。『これで独裁者の命運は尽きた』と」

女 「どういうこと？」

男 「キューバ人たちは勝利を確信して踊り出したんだ」

女 「……」

男 「ゲバラも『こいつら正気か？』と目を疑ったらしい」

男 「これがキューバ人の根っからの楽天性さ。この性格がなければキューバの今はないかもしれない。ゲバラもこの楽天性に救われた。ゲバラがキューバを愛したのもわかるよ」

男 「本当に来てよかった」

男 「今まで本で読んだだけだったけど・・・やっと、この空気を直に感じる事ができた」

女 「そうね」

そのうちとうとうと男は寝てしまう。

女 「寝たの？」

女 「ねえ」

女 「誠さん・・・」

女はベッドからそっと出て服を着る。

男の方を気にしながら荷物を物色する。

現金とカードを抜き去り部屋から出て行く。

女は道でタクシーを拾う。

終わり